

## 特集 認知行動療法と社会との接点

## 認知行動療法と社会との接点

金 吉晴

認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy: CBT) は、うつ病、不安障害などの疾患の治療法として、場合によっては薬物療法と同等またはそれ以上の効果が期待される治療法であり、増強療法についての効果はさらに高く、多くのエビデンスが集積されつつある。この治療法は患者の認知と行動を変容させることを目的としており、疾患の治療以外にも、患者と社会ないし家族との接点において生じた葛藤、行動の逸脱、機能低下、それらと関連する特定の症状を改善させる治療法としても有効である。実際、日々の臨床において、多くの精神科医が遭遇しているのは、通常の疾患、治療モデルに合致しない、人格もしくは状況の病理に基づく行動異常や、薬物乱用、加害行為、自殺、解離などであることが多い。解離の一部は単独の疾患として存在するというよりは、PTSDなどの病態の部分症状として併発し、病態を遷延化させる用意として働くこともある。本学会では昨年、疾患治療としてのCBTについてのシンポジウムが組まれたところであるが、今回は、CBTのさらなる臨床応用の可能性を探るべく、こうした社会との接点、すなわち特殊な状況との遭遇において生じた触法を含む行動上の問題や、増幅された性格特徴、あるいはPTSDなどの疾

患モデルとは異なるトラウマ性の被害に対する有効性を検討したい。金は、犯罪被害ならびに惨事ストレスにおいて生じた解離についての持続エクスポージャーの応用可能性について発表を行った。また菊池は触法精神障害者の加害行為への司法精神病棟における実践を踏まえ、英国での研修、CBTプログラムの導入の経験を参照しつつ発表を行った。小林は、触法青少年の調査、臨床の経験を踏まえ、そうした対象患者に見られる薬物依存へのCBTの臨床実践について報告した。加茂は家庭内暴力を受けた母子の多年にわたる支援ならびに長年の経験を踏まえ、その養育機能の改善を目的としたParent-Child Interaction Therapyの臨床実践について報告をした。堀越は米国における臨床経験を踏まえ、日本の受刑者に対するCBTの臨床実践について発表した。

CBTとはかくマニュアル的に考えられがちであるが、こうした領域を扱うとき、患者の多様性に応じて柔軟な臨床対応力が求められ、また多職種連携も必要となる。本シンポジウムでは、多様な臨床領域におけるCBTの応用可能性を探るだけでなく、CBTに関する一般精神科医の認識を新たにするために多面的な討論がなされた。